

くまにち 論壇



慶応大大学院教授

蟹江 憲史

かにえ・のりちか 専門は国際関係論、地球システムガバナンス。著書に「SDGs (持続可能な開発目標)」など。52歳。

米国に来て2カ月近く、出張での短期滞在と生活するのでは違うところが多々ある。中でも家族で暮らして初めて分かることがあると感じているのが、小学5年の長男がプレーする少年野球である。

日本の野球は今も米国の影響を強く受け、大谷翔平選手をはじめとして大リーグで活躍する日本人選手も多い。しかし少年野球に限ると、米国から届く情報は驚くほど少ない。長男が米国生活になじむ最良の方法はスポーツだろうと考え、渡米前から友人や、そのまた友人をたどりながら「野球家族」に連絡を取り、調査を進めた。どうやら、この国にはいくつか異なるリーグがあることが分かった。

一つが、地域をベースにしたリトルリーグだ。私の住むのは首都のすぐ隣のメリーランド州で、ここには北部と南部の2リーグがある。登録したい人が各リーグに登録し、その人数と希望によって1チーム10〜12人程度に振り分けられるのが特徴だ。コーチは基本的にボランティアで親や専属コーチが務め、春には選抜チームが編成される。このリーグは日本にも支部がある。子どもたちは全米のワールドシリーズや世界大会で頂点を目指す。

米少年野球に見る民主主義

もう一つが、よりレベルに合わせてたリーグだ。「レク」「セレクト」「トラベル」という3段階に分かれており、レクは初心者、セレクトは中〜上級者向け。トラベルは本格的な競技レベルが求められ、遠征試合もある。この3段階は野球に限らず、米国のスポーツ競技一般に適用されているようだ。セレクトとトラベルの各リーグはトライアウトがあり、チームに入るにはテストを通過する必要がある。

本格的に野球をやるなら、と最初はトラベルリーグを勧められた。しかし、野球の本場でテストに臨むならば落ちたときの保険が必要だ。長男はリトルリーグに登録しつつ、トラベルリーグのトライアウトを受けた。幸いテストをパスし、二つのチームを掛け持ちすることになった。

ボールはいずれも硬式を使う。ベースボールといえば硬式という意識が浸透しており、日本の軟式ボールを見せると皆驚く。ただし硬式を使う代わりに、子どもの健康やケガ対策は徹底している。球数制限はリーグにより多少異なるようだが、基本的に1試合35球前後。それ以上になつた場合、2日間は休養を置く。さらに、1週間に65球以内、といった具合で制限が設けられている。股間

に着けるプロテクターも必須。最初は違和感を持っていたわが子も、今やすっかりなじんでいる。

米国の少年野球を見ていて感じることは、徹底的に個人の成長を考えたシステムとなっている点だ。

同じチームで、先発メンバーや補欠といった分け隔てはない。試合では全員が打席に立ち、休憩を適宜取りながら交代で守備に就く。成長期の子どもにとって適切なルールだと思う。子どもたちは精神的にも肉体的にも成長度合いが異なるし、能力に優れた子が突然調子を崩すこともあれば、その逆もある。

チームは年齢別編成で、日本のように上級生に出場機会が偏ることもない。もちろん、同じ年齢が集まるチーム内に上手な子もいれば、そうでない子もいるのだが、打順を打率順にするなどチームごとに工夫がみられる。つまり、機会は平等に与えられるつつ、競争も導入されているというわけだ。

監督や「声の大きい人」の意向で出場機会が増減するといった「不条理」はない。背景には、子どもにとっての不条理があれば、親がきちんと主張するという、民主主義の基盤があるように思う。指導方針が合わなければ移籍も頻繁に起こるといふが、そうなるとう月謝でコーチ雇用などを含む経営事情が悪くなる。チームも耳を傾けざるを得ないのだ。

練習では、とにかく個人のスキル(技術)の向上が強調される。これもまた、成長に必要なことだし、皆がスキルアップをすれば、競技自体の基盤強化になる。私も補佐コーチとしてチームに参加している。少年野球を通じて、子どもが伸び伸びと育ち、スポーツが社会に根付く米国のエッセンスを感じつつある。